

熊谷うちわ祭における権威の変遷

—外部の祭礼との関連性に注目して—

市 東 真 一

SHITO Shinichi

非文字資料研究センター 2019年度奨励研究採択者
神奈川大学大学院歴史民俗資料科学研究科 博士後期課程

【要旨】本研究では、埼玉県熊谷市の熊谷うちわ祭を事例に、祭礼における権威に関する動向について注目する。筆者は、これまで熊谷うちわ祭の参与観察を行い、祭礼内部の旦那衆や鳶との関係について検討を行ってきた。同祭礼の中で近年日本橋のうちわ天王祭や京都八坂神社との関連性が盛んに主張されてきた。

これらの他の祭礼との関係性については、熊谷うちわ祭の優位性を主張する上で重要な存在となっている。従来の祭礼研究においては、祭礼は日常生活から逸脱した期間であるため、権威や権力が存在しない無秩序な時間軸との認識として研究が行われていた。しかし、一方で祭礼の中には日常とは異なる権威や権力は存在している。それらを対象とした研究については、現在の祭礼研究においてはあまり展開されていなかった。

以上の課題をもとに、本稿では熊谷うちわ祭の参与観察の記録とともに祭礼に関するパンフレットなどの資料を駆使しながら、熊谷うちわ祭の権威の変遷について検討を行う。本稿では、熊谷うちわ祭の外部的な祭礼との関係性について、はじめに日本橋のうちわ天王祭と京都府の祇園祭との関連性について分析を行った。その後、熊谷うちわ祭の内外に存在する権威的要素等の検討を行った。熊谷うちわ祭の権威の変遷を分析した結果、外部的な京都祇園祭などとの関係性を持つことは、祭礼の正当性を祭礼内外に主張することを目的としていた。さらに、外部の祭礼との関連性は、消失した権威を他の場所から借用して持ってきていることが明らかになった。

本稿では、それらの事例から外部の祭礼とのつながりとその影響について考察していく。

Changes in the Authority of the Kumagaya Fan Festival in Relation to Other Festivals

Abstract: This paper looks at the Kumagaya Fan Festival held in Kumagaya City, Saitama Prefecture, to reveal changes in the authority of festivals. Previously, the author conducted participant observation of the festival and examined the relationship between eminent male citizens, or “dannashu,” who financially support the festival and manual workers called “tobi.” Nowadays, this festival is often associated with the Tenno Festival in Nihonbashi, Tokyo, and Yasaka Shrine in Kyoto.

The Kumagaya Fan Festival’s relationship with other festivals plays an important role in claiming its predominance. Since festivals are out of the ordinary, traditional studies have

deemed power and authority to be non-existent during such events. Yet when festivals are held, they continue to be present though different from what we see at ordinary times. Such power and authority have not been a common subject of current festival studies.

Given this background, the paper examines changes in the authority of the Kumagaya Fan Festival through participant observation records and brochures. The author closely looked at the Fan Tenno Festival in Tokyo and the Gion Festival in Kyoto as well to explore the relationship between the Kumagaya Fan Festival and other festivals. Also examined was the authority factor surrounding the Kumagaya Fan Festival and other festivals. An analysis of changes in the authority of the Kumagaya Fan Festival revealed that the festival is associated with other events like the Gion Festival and thus its validity can be claimed inside and outside of the festival. Furthermore, it was found that the Kumagaya Fan Festival has adopted the once-lost authority of other festivals. Based on these findings, this paper discusses the festival's relationship with other festivals and the influence of these relationships.

問題の所在

本研究では、埼玉県熊谷市の熊谷うちわ祭を事例に、祭礼における権威に関する動向について注目する。

筆者は、これまで熊谷うちわ祭の参与観察を行い、祭礼内部の旦那衆や鳶との関係について検討を行ってきた。その中で、同祭礼では日本橋の天王祭や京都八坂神社との関連性が近年盛んに主張されてきた。熊谷うちわ祭では東京都中央区日本橋で行われる小舟町の天王祭（通称 うちわ天王祭）との関係や絹産業との関わりが祭礼の公式のパンフレットに記載されるようになる。なお、これらの記載は平成 27（2015）年からである。

これらの熊谷うちわ祭と他の祭礼の関係性については、同祭礼の歴史的な優位性を主張する上で権威的な存在となっている。従来の祭礼研究においては、祭礼は日常生活から逸脱した期間であるため、権威や権力が存在しない無秩序な存在という認識のもとで研究が行われていた。しかし、一方で祭礼の中には権威や権力は存在していることが指摘できる。それらを対象とした研究については、現在はあまり展開されていなかった。

本稿では、熊谷うちわ祭の外部的な祭礼との関係性について検討を行う。そこから、祭礼における権威的な存在となる外部の祭礼とのつながりを作る過程とその影響について考察していく。

I 祭礼と権威に関する研究

(1) “権威・権力”の民俗誌

民俗学と権威と権力 日本民俗学では、現在でも一部の史学の系統から政治的要素や格差などの社会関係を無視した牧歌的な農村を作り出しているという批判がある。信濃史学会の元会長の一志茂樹は、民俗学について以下のように苦言を呈している。

箇々の民俗的事象につき、その起源にさかのぼって、発生的な意味を解明することに重点を置いてある、考証学的、国学的傾向は、現在における国民俗学研究の主流をなしてみるとみてよいであろうが、その故に、とかく、農村に足場さへもってみない知識層のひとびとが、懐古的、耽美的、異国的な、「現実」からはかなり浮き上がったイメージの上にこの学問を積みあげてみるのではないかとさへ極言したいほどの偏倚のうかがはれる向がないでもない。〔一志 1974 : 263〕

一志の指摘は、民俗学の研究者が実際の農村を知らずに懐古的や耽美的で異国的なものに注目するばかりで、実際の村落に存在する格差や差別などを対象としていないのではないかというものである。

一方で、民俗学では権威や権力が使用されていないが遠巻きにそれに触れている研究は多分に存在する。赤坂憲雄は、『現代民俗誌の地平2 権力』の序文の中で、民俗や伝承については近代の制度や行政などの権力や権威が絡んでいて、民俗学ではそれらを無視しているのではなく間接的に指摘していたと述べている〔赤坂 2004 3〕。しかし、赤坂自身「民俗学のフィールドにうごめく見えない政治・権力を浮かび上がらせ、記述する知の方法と言ったものは、いまだどこにも存在しない。」と、現在まで権力を映し出す民俗学の方法がないとしている。この赤坂の指摘する、政治的な動向を描き出す民俗誌の方法には、祭礼研究が有効であると筆者は考えている。

(2) 祭礼と権威の視点

祭礼の内部への視点 イヴ＝マリ・ベルセは、『祭りと叛乱 16～18世紀の民衆意識』の中で、祭礼は既成の権力に対する反乱であり、「集団暴力と民間伝承は互いに無関係ではない」〔ベルセ 1980 : 29〕と指摘している。これらの研究では、祭礼は日常生活から逸脱しているため、権威や権力が存在しない無秩序な時間空間であると認識されていた。福間裕爾は、博多祇園山笠を模倣して創造された北海道の芦別山笠を参考に検討を行った。福間は、芦別山笠では博多祇園山笠を「本家」と呼称し、その祭礼の様式を権威的なものにとらえて積極的に導入していると報告した。これらの祭礼では、模倣のもととなった祭礼を本家、自分たちを分家などと親族関係のように呼称していたことを指摘している。

渡邊欣雄は、『民俗知識論の課題—沖縄の知識人類学—』において、門中の中には血筋、家筋とも違う権威的な関連性を主張するつながりがあることを指摘している。これを渡邊は、「権威筋」と定義した。この権威筋とは、系譜の擬制、より正確には系譜関係の発見と創造〔渡邊 1990 : 30〕される権威のつながりであると渡邊は述べている。いずれも、権威的なつながりが創造されることにおいては、権威のある人物とのつながりを創造することにより門中の正統性を示すことが目的となっている。⁽¹⁾

一方、福間の指摘する芦別山笠と博多祇園山笠の関係については、正確な系譜が存在せず本家と分家の創造となっている。そこには、直接のつながりを示す系譜が存在していないものの、権威的な関連性が後の時代に創造されている。福間の研究では、電子媒体による伝承の影響と柳田国男の周圏論の批判が中心となり、祭礼における本家と分家の関係について分析が行われていなかった。

研究の対象と方法 本研究で対象とする祭礼の権威については、祭礼組織の内部に源があるものと

外部に源があるものに分けることができる。内部的に源がある権威は、祭礼組織の旦那衆の存在と雇用される鳶などの人びとの間で影響されているものである。筆者はこれまで、この祭礼組織内の権威構造⁽²⁾について分析を行ってきた。

本稿で対象とする他の祭礼との関連性は、熊谷うちわ祭の中で近年主張されている権威的なつながりである。これらの関連性が、平成末期の祭礼においてどのように受容されていたのか考察する。

II 熊谷市と熊谷うちわ祭

(1) 熊谷市と祭礼の行事

熊谷市の概要 熊谷うちわ祭が開催される埼玉県熊谷市は、埼玉県北部に位置する。熊谷市は、群馬県と埼玉県の境目に位置している。江戸時代、中山道の宿場町として発展していた。明治6(1873)～9(1876)年まで、入間県と群馬県の合併により成立した熊谷県の県庁所在地となり、地域の中核都市として発展した。明治16(1883)年7月28日に日本最初の私鉄線路として、熊谷は日本鉄道株式会社によって上野～熊谷間に鉄道が開通する。その鉄道開通により、北関東と東京を結ぶ物流の基点となる。昭和20(1945)年8月14日、米軍による空襲により358000坪、3630戸が焼失した。戦災罹災者は、15390戸・死者234人・負傷者3000人を数えた〔熊谷市立図書館 2003:62〕。

熊谷うちわ祭の日程と特徴 熊谷うちわ祭は、毎年7月20～22日までの3日間行われる愛宕八坂神社の例大祭である。この祭礼は、「関東一の祇園」と称されており、山車7基、屋台5基が熊谷囃子を演奏しながら熊谷市市街地を巡行する(写真1参照)。この祭礼の特徴は、直径約30センチの巨大な摺り鉦を用いる囃子、2基以上の山車・屋台を向き合わせて囃子を競うヒッカワセタタキアイ(引



写真1 熊谷うちわ祭の山車・屋台

き合わせ叩き合い) が盛んに行われることである。この祭礼がうちわ祭と呼ばれるのは、祭典期間中に各商店で団扇が配布されたのが始まりである。現在でも、祭典期間中に行宮や各町内の会所で配布が行われる。

現在の熊谷うちわ祭は、7月20日～22日まで開催される。7月19日の午後9時より、熊谷愛宕八坂神社の境内で関係者だけで遷霊祭が行われる。7月20日は、各町の町鳶による神輿渡御や山車・屋台巡行が中心に行われる。7月21日は、各町の山車・屋台が行宮へ向けて巡行する巡行祭が行われる。7月22日は、熊谷うちわ祭の最高責任者である大総代が祈願文を奏上する行宮祭、午後9時よりお祭り広場と呼ばれる会場で本年度大総代と来年度大総代予定者による年番札の引継ぎ式である年番送りが行われる。その後、午後11時頃に行宮にて還御発輿祭が行われる。深夜0時になると、一部町内を除いた各町区の青年集団である祇園会による神輿の還御が行われる。神輿が熊谷愛宕八坂神社に到着すると着輿祭の神事が行われる。その後、神輿庫の前で神輿洗いの儀が行われて行事は全て終了となる。

(2) 熊谷うちわ祭の歴史と祭典組織

熊谷愛宕八坂神社の由来 熊谷愛宕八坂神社は、熊谷市鎌倉町に鎮座する神社である。祭神は、軻遇突智命・須佐之男命・大市姫命・事代主命である。大永2(1522)年大善院3世行源法師が牛頭天王を勧請して邸内に創建したことが始まりとされる。文禄元(1592)年には市神・八坂・伊奈利の三神を合祀し、愛宕牛頭天王稻荷合社と称した。明治時代になると、社号が愛宕神社に改められた。社格は、無格社である。昭和20(1945)年8月14日、当社は大戦最後の空襲で焼失した。昭和26(1951)年、国道17号の拡張に伴って八木橋デパートの前から秩父鉄道上熊谷駅付近に移転した。

なお、熊谷うちわ祭の日程や執行については、年番町が決議してそれを愛宕八坂神社の宮司が承認するという形で決められている。

祇園柱から神輿へ この祭礼は、寛延3(1750)年に各町内が合同で祇園祭を行ったのが起源とされている。文化年間(1804-1818)に書かれた『汚隆亀鑑』によると札の辻と呼ばれる場所に祇園柱という白いサラシがまかれた柱が立てられていたという〔埼玉県1991:843-851〕。そこに、鉢形村の太神楽師(軽業師)が祇園柱に上り踊りを踊っていたとされる。文化年間には、この軽業師による踊りは廃絶し、宿内統一で屋台狂言が祭礼の中心になっていたという。また、一部記述では屋台は近隣の宿場町である深谷宿より借り受け、「子供おどり」と称して宿内の子どもを踊らせていたとされる。さらに、宿内が上下に分かれて江戸より芸者を呼んで、屋台上で踊りが行われていたともされている。寛政元(1789)年6月の「熊谷宿祇園祭礼神輿渡御由来」によると、正徳年間(1711-1716)に仲町の熊谷寺境内社の奴稻荷神社の神輿を借りて渡御が行われたと記されている〔埼玉県1991:392-394〕。宝暦3(1753)年には神輿を借りることができなくなり、神輿渡御が中断となる。天保元(1830)年、大善院十五世秀宝と町役人石川兵左衛門が発起人になって、町内から浄財を募って自前の神輿が製作された。この神輿は、幡羅郡弥藤吾村の修験者が製作した。その後、大型の神輿になってから町民が神輿渡御に参加する。その際には、「江戸風」と称される担ぎ方をしていた。この神輿は、昭和20(1945)年の空襲で焼失した。現在、祭礼に登場する神輿は、昭和33(1958)年に新調されたものである。

団扇配布と山車・屋台の登場 幕末の熊谷宿では、祭礼の日に赤飯を炊いて客に、「赤飯振る舞い（せきはんぶるまい）」を行っていたとされている。明治維新後、泉谷横町の料亭「泉州楼」の主人が、赤飯代わりに江戸日本橋にある団扇問屋の伊場仙の名入の渋団扇を配ったところ好評を博す。次第に他の店でも屋号や紋章を入れた団扇を配るようになった。その後、祭礼自体がうちわ祭と呼ばれるようになる。明治24（1891）年、本三四（現 第弐本町区）が江戸神田の紺屋が個人所有する山車を買い受け、町内での山車の巡行と神田囃子の演奏が行われた。その後、続々と各町内が山車・屋台を持つようになる。明治27（1894）年に鎌倉区が山車を製作し、明治31（1898）年に第壱本町区が山車を製作する。明治35（1902）年に、筑波区が鴻巣から山車を購入する。大正13（1924）年、弥生町区が祭礼および、新しく製作した山車で巡行行事に参加する。昭和22（1947）年に荒川区と銀座区が祭礼行事に参加する。この年に年番町を担う8か町制（第壱本町区、第弐本町区、筑波区、鎌倉区、仲町区、弥生町区、荒川区、銀座区）が成立した。昭和35（1960）年、荒川区から伊勢町区が独立、昭和55（1980）年、仲町区から櫻町区が独立し、独自の屋台にて祭礼と巡行に参加する。

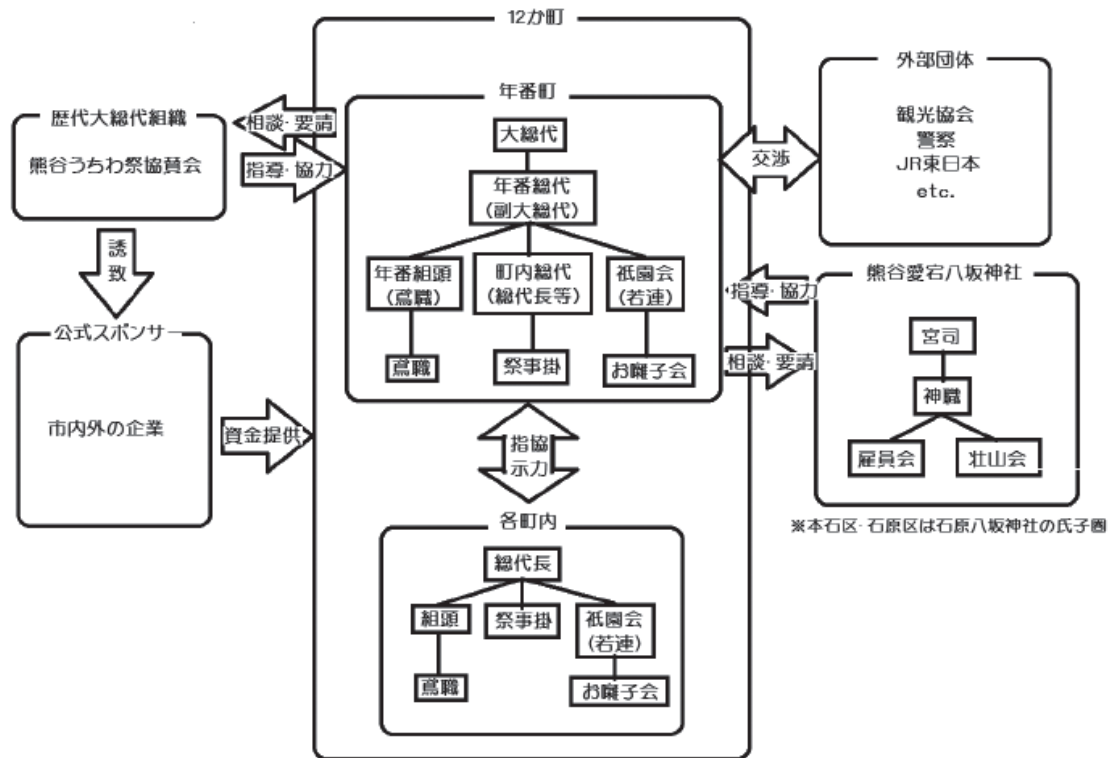
熊谷うちわ祭の総代と祭典組織 明治39（1906）年に第壱本町区、第弐本町区、筑波区、鎌倉区、仲町区で祭礼を仕切る年番をまわす年番町の制度が成立したとされている〔新島2001:54〕。その後、大正13（1924）年に銀座区、弥生町区が屋台を製作し、同年に5か町の神事に弥生町区が祭礼に参加する。その後、昭和22（1947）年に、荒川区が屋台を製作し、同年に銀座区と荒川区が復興の勢いで神事に参加する。ここで、現在の8か町制度が制定される。昭和32（1957）年になると、祭礼の最高責任者の大総代が創設される。大総代という役割が創設される以前は、年番町の総代長が祭礼の総代を兼ねていたものであった〔新島 2001:54〕。熊谷うちわ祭は、戦後年々祭礼の規模が拡大していき、年番町の総代長で祭礼を統括するのが困難になった。そこで、年番町では町内の総代長とは別に祭礼全体を統括する大総代という役割が創設された。現在の熊谷うちわ祭も年番町が中心となって祭礼を運営する年番町制度のもとで祭礼が行われている（表1参照）。

熊谷うちわ祭については、現在では希薄になったものの、祭典関係者であることを名誉としている人びとが多く存在する。そのことについては、重竹賢一の『熊谷祇園祭稿』では以下のように記載されている。

御仮殿に揚げられる町人に記されている家の名は、熊谷の祭りを始めた宿役人の家で、熊谷の草分け六人衆と呼ばれた石川兵左衛門（南石川）、石川藤四郎（北石川）、布施田太郎兵衛、布施田六左衛門、竹井新右衛門、鯨井久右衛門の功績に感謝するために毎年掲げるわけであり、祭事掛りは町役人と同じ権力をもち御用事とも称して中々の名誉で旧家でないと祭事掛りになれなかったといわれております。〔重竹 1992:36〕

この草分け六人衆の提灯は現在でも御仮屋に飾られている。『熊谷祇園祭稿』では、江戸時代の祭事掛りは町役人と同等の権力を持っていたと記されている。この祭典関係者に関する特権意識は、現在の祭礼でも色濃く残り、町内によって多少異なるが年番町の当番制に入っている8か町が特に強く持つ傾向にある。年番町に属さない伊勢町区、櫻町区、本石区、石原区の4か町ではほとんどが自治会の関係者は総代や祭事掛などに就任していることが多い。そのため、8か町と4か町での祭礼や総代

表1 熊谷うちわ祭の組織図



の立場に関する意識は大きく異なっている。また、現在でも祭事係や総代として誇りに思っている人びとが多くいる。過去の熊谷うちわ祭については、祭典組織に関わるといのは旧家や名家の証しであるという認識がある。そして、祭典組織自体に関わること自体が一種の誇りとなっていた。2000年代以前の熊谷うちわ祭の祭典関係者は、ほとんどが熊谷市内の旧家や名家の人びとで構成されていたとされる。しかし、現在では一般企業に勤めたり、熊谷市外から参加していたりする人びとが多く存在する。

熊谷うちわ祭の町鳶たち 熊谷うちわ祭で活動する町鳶は、祭礼に参加している町内に在住している人が中心である。各町区の町鳶たちは、各町の鳶組によってまとめられている。完全に鳶だけで組織されるのではなく、一部に他の建築系の作業員や他の業種の人びとも所属している。熊谷鳶組合では、一番組から十四番組までが組織されている。熊谷うちわ祭に参加している鳶は、全員がこの組合に所属している。熊谷鳶組合は、専門の鳶以外の他の業種の人びとも所属している。現在は、熊谷鳶組合は一番組から十四番組までが所属する。この内、熊谷うちわ祭に関わるのは、十番組、十二番組、十三番組、十四番組を除いた10組である。熊谷うちわ祭に関わる鳶は、七月会と呼ばれる会に所属している。この七月会は、熊谷うちわ祭に関わる鳶だけが入会する組織である。七月会は、熊谷うちわ祭の施行を円滑に行う目的と若手の鳶の育成を目的に結成された組織である。

熊谷木遣保存会は、熊谷市指定民俗無形文化財の熊谷木遣で保存会もある。熊谷木遣保存会に所属しているのは、各町の組頭である。彼らは、定期的に木遣の練習を行っている。木遣保存会以外にも、若鳶睦会という20代～60代までの若い鳶が加入する組織がある。若鳶睦会は、毎年1月6日の出初式の梯子乗りを専門に行う組織である。彼らは、かつては町鳶として町内で雇用される存在であったが、現在は自分たちの町内（帳場）を中心に建築業者として、町内の仕事を請け負っている。

現在の熊谷うちわ祭で活動する鳶の場合、町内との関係より祭典関係者の間だけで葬式の手伝いをしたり、出入りをしたりする関係になっている傾向にある。このように、現在の鳶は熊谷うちわ祭やその祭典関係者の中だけで、町鳶としての活動や旦那との関係が行われている。現在熊谷うちわ祭で活動する鳶は、生業として町鳶で生計を立てている専門的な鳶ではなく、祭礼の中の役割として存在する鳶に変化している。

Ⅲ 年番町の由来と表象

(1) パンフレットに見る祭礼

パンフレットの由来の変遷 熊谷うちわ祭では、毎年年番町を中心に祭礼の準備の他、それに関係する事業が行われている。その一つに、パンフレットの制作も含まれている。このパンフレットは、その年の年番町が担当するため、多少内容に変更があるものの熊谷うちわ祭の由来などが簡単にまとめられている。現在の熊谷うちわ祭のパンフレットには、以下のように記述されている。

うちわ祭は、当地に鎮座する八坂神社のご祭礼です。八坂神社は、文禄年間（1592～）に京都八坂神社を勧請し、現在鎌倉町にある愛宕神社に合祀されたものであります。

熊谷の夏祭りの起源を示す最初の記録は、江戸中期の寛延3年（1750）に、当時各寺社ごとに行っていた祭りを町内統一の祭りにする上申書でありました。町役人の許可により、以来町内全体の祭りとなり、現在の祭りの形態が作られました。

その頃の祭事係は、祭りの期間一躍町役人と同じ力を持ち、祭りのすべてを取り仕切る祭番となり、形態とともに権限も脈々と受け継がれております。天保年間（1830～）は祭りの中興の時代といわれ、重さ200貫の神輿が新調され、祭りの原点ともいえる全町合同の神輿渡御が始まりました。またこの頃より、町内各店が祭りの期間中、買物客に赤飯をふるまったことから、「熊谷の赤飯ふるまい」として評判となり、祭りの名物となりました。「うちわ祭」の名称の由来は、夏の祭礼で配布されていたうちわを原点として、明治35年頃より、料亭「泉州楼」の主人がうちわを配付したことにありと語り継がれています。東京での修行中に、うちわが飛び交うことで知られていた「天王祭」からの影響を受けた主人は、老舗「伊場仙」から渋うちわを買い入れ、熊谷の祭礼で配り始めたことが発端となっています。この「うちわ」の登場が好評を博し、その後に各商店でも屋号などを記したうちわを出したため、買い物は「熊谷うちわ祭」の日といわれるようになりました。時を同じくして絹産業などの発展などにより町はにぎわい、各町競って山車・屋台を購入し、神輿渡御と山車・屋台巡行による現在のうちわ祭の原型はこの時に作られ、今日まで続いております。このように「町民一体として始まった伝統」「江戸からの祭文化の継承」「自ら熱意で祭をつくり上げてきた熊谷人の心意気」が融合し、今や関東一の祇園として発展しております。

（令和元（2019）年 熊谷うちわ祭パンフレットより引用）

このパンフレットには、熊谷うちわ祭の由来についてまとめられている。その中には、「京都八坂神社」、「天王祭」、「絹産業」という文字が登場している。また、それ以外に、「町民一体として始まった伝統」、「江戸からの祭文化の継承」、「自ら熱意で祭をつくり上げてきた熊谷人の心意気」ということが記されている。

天王祭と絹産業の記述 一方、平成 24（2012）年に熊谷うちわ祭が熊谷八坂神社祭礼行事として熊谷市重要無形民俗文化財に登録された要因は、江戸中期から開始された祇園柱の設置を伴う祭礼行事、神輿渡御を中心とした祭礼行事、明治後期から開始された山車・屋台の巡行行事などの原型が現在も残されていることから文化財指定に至ったとされている⁽⁴⁾。いずれも、これらの熊谷市重要無形民俗文化財に指定された要因については、パンフレットにはほとんど触れられていない。一方で、これらの記述に関しては、近年新たに追加されたものである。

熊谷市重要無形民俗文化財に登録された翌年の熊谷うちわ祭のパンフレットには以下のように記されている。

うちわ祭の由来

うちわ祭は、当地に鎮座いたします八坂神社のご祭礼です。

八坂神社は、文禄年間（一五九二～）京都八坂神社を勧請し、現在鎌倉町の地にあたる愛宕神社に合祀されたもので、京都八坂神社の末社にあたります。

熊谷の夏祭りの記録が文書に出たのは、江戸時代寛延三年（一七五〇）で、これによりますと、もとは各寺社ごとに別々に行っていたとあり、同年四月に町民から宿場役人に願い出て許され、以来各町内いっせいに行うようになりました。この時代から、熊谷の夏祭りの形態が作られたといえましょう。

各町から総代・祭事係、年番町から大総代が選ばれ、祭りの一切の責任を負いますが、これはもと寺社で起こっていた名残を伝えているもので、その頃の祭礼係は一躍、役人と同じ権力を持ち、ご用番ともいい、仲々の名誉役で、旧家でないと祭事係になれなかったそうです。

祭りの日、参勤交代の大小名もしばしば通行止めにあい、しかたなく熊谷堤を往来しなくてはならず、「八坂神社のお祭りには、大小名も一歩遠ざかって通った」と、当時の町民は得意げに語ったといわれています。

天保時代（一八三〇～）が祭りの中興といわれ、この祭りの日、各戸で赤飯を炊いて疫病除けをしました。商店では祭りの期間中、買物客に赤飯をふるまったことから、熊谷の「赤飯ふるまい」は祭りの名物になりました。

うちわ祭の起こりは、この手数のかかる赤飯の代わりに、料亭「泉州楼」の主人が江戸から買入れた渋うちわを客にふるまったところ評判になり、のち各商店でも赤飯の代わりにうちわを出したため、誰いうなく「買い物は熊谷のうちわ祭の日」といわれるようになりました。事実、三銭の買い物にも五銭のうちわをふるまったことから、その評判は大変なものでした。

こうした疫病退散祈願に始まったこの祭りも、いつしか五穀豊穰、商売繁盛をも祈願する祭りとなりました。

（平成 25（2013）年 熊谷うちわ祭パンフレットより引用）

いずれも、平成 25 (2013) 年のパンフレットには、祭事系の権威について詳しく記されている。また、名称の由来に関しても、江戸から団扇を取り寄せて頒布したことにより団扇が行われたことが記されている。それ以前のパンフレットには多少の違いはあるが、ほとんど同じ内容のものが記されていた。

第壹本町区での改変 その後、祭礼の由来の表記が大きく変わったのが、平成 27 (2015) 年のパンフレットである。以下、平成 27 (2015) 年のパンフレットを引用する。

関東一の祇園 熊谷うちわ祭

うちわ祭は、当地に鎮座する八坂神社のご祭礼です。

八坂神社は、文禄年間（一五九二～）に京都八坂神社を勧請し、現在鎌倉町にある愛宕八坂神社に合祀されたものであります。

熊谷の夏祭りの文書に残る最初の記録は、江戸中期の寛延三年（一七五〇）に、当時各寺社ごとに行っていた祭を町内統一の祭りにする上申書でありました。町役人の許可により、以来町内全体の祭りとなり、熊谷の夏祭りの形態が作られました。

その頃の祭事係は、祭りの期間一躍町役人と同じ力を持ち、祭りの全てを取り仕切る祭番となり、形態とともに権限も脈々と受け継がれております。

天保年間（一八三〇～）は祭りの中興の時代といわれ、重さ二〇〇貫の神輿が新調され、祭りの原点ともいえる全町合同の神輿渡御が始まりました。またこの頃より、町内各店が祭りの期間中、買物客に赤飯をふるまった事から、「熊谷の赤飯振る舞い」として評判となり、祭りの名物になりました。

「うちわ祭」の名称の由来は、明治三十五年頃より、料亭「泉州楼」の主人が、東京での修業時代に、神田明神の「天王祭」でうちわが飛び交う祭を見た事などにより、東京の老舗伊場仙から渋うちわを買い入れ、赤飯のかわりに客にふるまったところ大評判となった事に始まります。

その後各商店でうちわを出したため、買い物は「熊谷うちわ祭」の日といわれるようになりました。

時を同じくして、絹産業などの発展などにより町はにぎわい、各町競って山車・屋台を購入し、神輿渡御と山車・屋台巡行による現在のうちわ祭の原型はこの時に作られ、今日まで続いております。

このように「町民一体として始まった伝統」「江戸から祭文化の継承」「自ら熱意で祭をつくり上げた熊谷人の心意気」が融合し、今や関東一の祇園として発展しております。

（平成 27 (2015) 年 熊谷うちわ祭パンフレットより引用）

このパンフレットには、「天王祭」、「絹産業」における記述が初めて登場する。その後、令和元(2019)年のパンフレットにおいて、この天王祭と絹産業の記述が存在する。筆者が調査を開始した平成 27 (2015) 年から令和元 (2019) 年までの熊谷うちわ祭を見ても、多少の変動はあるものの「京都八坂神社」と「天王祭」と「絹産業」という記述について確認ができる。この天王祭と絹産業の記述⁽⁵⁾に関しては平成 27 (2015) 年より登場している。

(2) うちわ天王祭との関係性

熊谷うちわ祭とうちわ天王祭 熊谷うちわ祭に記されている「天王祭」とは、神田祭・山王祭と並ぶ「江戸三大祭」と称された神田明神の境内の天王社の祭礼である。この祭礼は、元和2(1616)年には行われていたとされる。かつては神田、日本橋、京橋などの町内が参加していた。現在、小舟町でのみ祭礼が行われている。この天王祭と熊谷うちわ祭の関係については、平成27(2015)年、江南文化財センターと熊谷八坂神社祭礼行事保存会が執筆した『熊谷うちわ祭の歴史』に詳しく記されている。『熊谷うちわ祭の歴史』によると、神輿から山車が中心の祭礼に変化する間の明治36(1903)年、各商店からのうちわ配布が始められたとされる。

この熊谷うちわ祭の団扇について、早くから指摘したのが新島章夫であった。新島は、東京の日本橋に「うちわ天王」と称される天王祭があったことを言及している。その後、平成27(2015)年7月3日の『埼玉新聞』に「<熊谷うちわ祭>うちわ配布、明治35年頃 山車・屋台導入と同時期と判明」という記事が掲載された。この記事では、熊谷うちわ祭とうちわ天王祭の関係性について記されている。

熊谷市で20日から22日にかけて開かれる「熊谷うちわ祭」の名称の由来となった渋うちわの配布開始について、明治35(1902)年頃であることが、熊谷八坂神社祭礼行事保存会と市江南文化財センターの共同調査で判明した。(略)文化財センターなどによると、半次郎は明治25(1892)年頃から、日本橋の料亭「八百善」へ修業に行った。そこで現地の祭礼「天王祭」を見学し、会場を飛び交ううちわに感銘を受けたという。明治27(1894)年に泉州を開店。地元の筑波町が山車を購入した明治35年頃、伊場仙から渋うちわを購入したとされる。(以下省略) [埼玉新聞：2015]

この新聞記事によると、泉州楼の初代店主である萩原半次郎が日本橋の料亭八百善へ修行に行った際、現地で行われていた「天王祭」を目撃し感銘を受けて団扇配布を思いついたことが契機と記されている。平成27(2015)年に熊谷うちわ祭の記述にうちわ天王祭の記述が加わるようになった。また、現在も熊谷うちわ祭の関係者が小舟町の天王祭に参加している。さらに、伊場仙の社長を熊谷うちわ祭に招待し、萩原半次郎の子孫である第一本町区の総代と面会し会食することが行われていた。

伊場仙と団扇 現在、熊谷うちわ祭では、うちわ祭と称される理由については小舟町の天王祭との関連性が説明されている。一方で、それ以前の団扇との関係性については、天王祭については言及されていない。昭和45(1970)年に熊谷うちわ祭の祭典関係者である堀口熊五郎が記した『うちわ祭の今昔』には以下のように記されている。

又、熊谷の祇園夏祭をうちわ祭ということになったのはというと、明治二十年頃までは赤飯を炊いて祝い、祭り見物に来たお客全部に大盤振る舞いをしたそうです。その頃元の泉屋横町といって、本町四丁目から聖天町に曲る右角に泉州という有名な料亭があって、その家で神輿をかつぐ頭、若い衆に東京日本橋堀江町一丁目伊場仙商店製の渋うちわをもれなくくれましたのが始まりでした。そこで元は各商店でも全部渋うちわをくれたのですが、最近印刷技術が

進んできたので昨今は大変優美なものになっております。その頃一本五銭するうちわを、三銭の買いものをして一本ずつお客にもれなく各商店がこぞって差し上げるということで、従って沢山のうちわを差し上げて還ることをはばにし誇りとするので商いも相当以上にあったそうです。買い物をするなら夏祭でということで、うちわ祭の代名詞となったのであります。[堀口 1970 : 5]

この『うちわ祭の今昔』では、祭典期間中の赤飯の贈答から渋団扇の配布に変化した経緯が記されている。堀口の『うちわ祭の今昔』には、祭礼で団扇を最初に配布するようになったのが、料亭の泉州楼とされている。泉州楼は、東京日本橋にある老舗の団扇問屋の伊場仙（いばせん）から大量の団扇を買い込み、祭礼期間中に客に頒布したとされる。当時、熊谷うちわ祭では、団扇は東京から団扇を買ってきたことが始まりであるという認識があった。

絹産業と熊谷うちわ祭 また、あわせて平成 27 (2015) 年には絹産業と関係性についての記述が登場している。また、祭礼において町内の関係者の間では「絹産業より発生した金銭の一部が熊谷うちわ祭に流れていた」と語られていた。それらは、熊谷うちわ祭を実行するための会議のあいさつなどで、積極的に語られた。この絹産業との関わりについては、ある祭典関係者は「明治時代、絹産業で熊谷の町は賑わっていた。当然、資金をもとに各町内が山車・屋台を購入してきたんだ」と語っていた。現に、明治時代の熊谷市内は鉄道の要所として栄えていた。しかし、絹産業が祭礼の資金になったことを示す資料は存在していない。熊谷うちわ祭の参加町で絹産業と熊谷うちわ祭の関係について聞いたところ、明治時代の熊谷市内は繭を買い付けに来た仲買人が多く熊谷の町を訪れていたと語られている。ほとんどの祭典関係者については、明治時代の熊谷市内の賑わいと絹産業が関連していることを主張している。

一方で、ある祭典関係者（50代女性）は、「絹産業については、近年言い出したもので、そもそもそれより前は誰一人そんなことを言っている人はいなかった」と語っていた。現に、熊谷うちわ祭の過去のパンフレットにおいても、平成 27 (2015) 年以前のものでは絹産業の記述は見当たらない。このことに関して、聞き取りを行っていたところ、ある祭典関係者（70代男性）は「そもそも、絹産業、絹産業と言い出したのは、群馬の製糸工場が世界遺産に登録されてからだ」と語っていた。この「群馬の製糸工場」とは富岡製糸場のことである。富岡製糸場は、明治 5 (1872) 年に群馬県富岡市に設立された日本初の器械製糸工場である。この富岡製糸場は、ユネスコの世界遺産に登録されたのが平成 26 (2014) 年である。いずれも、熊谷うちわ祭のパンフレットに富岡製糸場がユネスコの世界遺産に登録されたことが大きく影響していると考えられる。

(3) 京都八坂神社と公式参拝

京都八坂神社と熊谷うちわ祭 熊谷うちわ祭のパンフレットでは、京都八坂神社より祭神の牛頭天王が勧請されてきたことが記されている。しかし、この京都祇園祭との関連を示す文書は存在しない。現在でも、熊谷八坂神社の祭神はどこから勧請されてきたかについては、不明である。

その一方で、京都八坂神社への意識については古くから存在していた。昭和 34 (1959) 年に各町内の若者を中心に祇園会が結成される。結成されるきっかけは、町内間で若者同士によるトラブルの

頻発が原因であった。祇園会という名称は、当時の祇園会の関係者（70代）によると、京都八坂神社の祇園祭の“祇園”という名称を使用することによって、若者が逸脱した行動をとらないようにという事で命名に至ったとされる。このように、京都八坂神社の祇園祭に対する権威的な意識がうかがえる。

公式参拝の成立 現在の熊谷うちわ祭では京都八坂神社に関連性を持つ取り組みが行われている。それは、京都八坂神社へ年番町の関係者が参拝に行く「京都八坂神社公式参拝」という行事である（写真2参照）。



写真2 京都八坂神社公式参拝

この行事は、毎年7月第2週の土曜日などに、その年の熊谷うちわ祭の関係者が京都八坂神社に行き、祭礼が無事に終わるように御祈祷を受けるものである。また、複数の祭典関係者は参拝することの意味について、「京都八坂神社は八坂神社の大本だから」や「熊谷の愛宕八坂神社もここから来たから同じ神社だから」と語っていた。さらに、京都八坂神社から授与された木札や扇などは熊谷うちわ祭の最初の行事である初集会で展示される。

この公式参拝については、正式な行事として登録されたのは平成25（2013）年からであった。それ以前は、町内関係なく総代たちが京都八坂神社の祇園祭の宵山などを見に行った際に、八坂神社を参拝するという形で行われていた。その後、平成25（2013）年になると熊谷うちわ祭の年番町が公式参拝と称して参拝するようになる。参拝に来る人びとは、その年の年番町の総代たちが参列するという形となる。また、熊谷うちわ祭の祭典関係者は、京都八坂神社の末社である愛宕八坂神社の氏子という認識を持っている人もいる。一方で、熊谷うちわ祭では京都八坂神社の関係者とのつながりを持つことが一種のステータスとなっている。特に、京都の祇園祭の関係者とのつながりを持つことによって他町内よりも自分たちは祭礼の中において優位であるとする意識が存在している。

(4) 公式参拝成立前夜

大阪万博でのつながり 京都八坂神社との明確なつながりができるようになるのは、昭和 45 (1970) 年である。この年、熊谷うちわ祭は大阪万博の「日本の祭り」へ参加した。当時、熊谷うちわ祭では山車を大阪まで運搬するのが不可能であったため、お囃子のみで参加することになっていた。しかし、ある祭典関係者がどうしても山車の上でお囃子を演奏したいと希望したところ、京都八坂神社の宮司の協力のもと都踊りで使用される屋台を借りることができたという。それ以来、熊谷うちわ祭の関係者が個人的に参拝するようになったという。

この時期、熊谷うちわ祭においては、各地の祭礼に遠征に行く機会が非常に多くなってきている。その中で、各地の祭礼との交流が生まれることによって、新たなつながりが作られていることが指摘できる。

京都祇園祭への参加 その後、熊谷うちわ祭の山車が京都祇園祭に直接参加することになる。平成 6 (1994) 年に、京都平安建都 1200 年記念事業の祭典として「全国祇園祭山笠巡行」が施行された。この催しでは、日本全国の山鉾屋台を京都の祇園祭で実際に巡行させるというものである。これに熊谷うちわ祭の銀座区の山車が参加した。

いずれも、京都八坂神社と熊谷愛宕八坂神社のつながりに関しては、歴史的文献がない一方で、交流事業などでつながりが創造されていったことが指摘できる。

IV 周縁の熊谷うちわ祭

(1) 祭礼内の権威の変化

旦那衆の変化 以上、熊谷うちわ祭のパンフレットをもとに祭礼外部のつながりについて検討を行った。これらの外部の存在との関連性の創造については、平成 27 (2015) 年あたりに大きく行われていた。本章では、熊谷うちわ祭の内部の動向について論じていく。熊谷うちわ祭の旦那衆については、町内で経済力や権力を持つ旦那衆が祭礼の指揮を執り、祭礼の資金援助を行っていた。彼らは、旧家や大店の年長者（隠居者）の男性で、町内においても特別な立場にいる人びとであった。

この総代は、熊谷うちわ祭では資金を提供したり、町内の祭礼の統括をしたりする役割があった。また、総代の役職に就けるのはごく限られた名家だけであった。祭礼以外でも、彼らは日常的に旦那衆として鳶に仕事を与えて、手間賃などを提供する人びとであった。それらの構造は、その後熊谷市内の人口減少をはじめとする事象により、旦那衆の解体が起きて大きく変化していった。その流れの中でも、鳶は根強く残り、祭礼に大きく関わりを持っていた。

現在、熊谷うちわ祭では年番町の総代を中心に祭礼が行われている。一方、祭礼の金銭については公式スポンサー制度と称して、熊谷市内の企業から祭礼の資金を調達している。現在の熊谷うちわ祭では、熊谷市の補助金と公式スポンサーを中心に祭礼の資金が捻出されている。前述の通り、かつて熊谷うちわ祭の資金は旦那衆の資金をもとに祭礼が行われていた。しかし、旦那衆は時代とともに解体していった。

鳶組と帳場 現在、熊谷うちわ祭での変動的な権威がある一方で、鳶職側の権威は現在も存在している。現在、熊谷うちわ祭の中では先祖代々から鳶組を引き継いでいる組頭が存在している。また、

ある鳶組が他町内の鳶組の帳場で仕事を行う場合は、必ずその帳場の組頭に挨拶をしなければならないという決まりがあった。現在では、その決まりは緩やかになっているものの、一部の鳶職の中では伝統的に受け継がれている。また、かつては鳶職が挨拶をしない場合は喧嘩などのトラブルになったとされている。いずれも、熊谷の中にはそれぞれに帳場とする仕事を請け負う町内が存在していた。

ある町では、1980年代に鳶組が解体された際、祇園会の中の人から組頭が設置された。そのことに対して、各町の鳶職と総代たちから批判が続出した。ある総代の話では、「正式な鳶組の引継ぎならば、他町内の鳶を移籍させて、そこで組頭とするのが正式な引継ぎ方だよ。だけど、あの町内では鳶でもない人がいきなり組頭になったからおかしいよ」と語っている人がいた。いずれも、各町内の鳶組では明確に帳場という領域が設定されている。その後、その町内では熊谷木遣保存会の中心となる年長の鳶になる旨を伝えて鳶として活動を許されるようになった。このように、今まで鳶職でなかった人が組頭になる場合は、鳶組合と熊谷木遣保存会の幹部に伝達がなければ活動ができないようになっていく。

鳶と芸能 また、熊谷うちわ祭の参加町内においては、木遣、纏振り、梯子乗りの芸能が伝承されている。かつては、これらの芸能が伝承できなければ鳶職として認められていなかった。熊谷木遣は、平成9（1997）年に熊谷市指定無形民俗文化財に指定された。現在、熊谷木遣は熊谷鳶組合に加入している組頭で結成されている熊谷木遣保存会によって継承されている。熊谷木遣は、江戸時代に江戸在住の木遣師が旧本町四丁目の組頭宅に宿泊した際、伝授された江戸木遣がもとと伝えている。現在も60数種類の木遣が伝承されている。この木遣師が泊まった家こそ、現在の熊谷木遣保存会の会長の家となっている。また、梯子乗りの梯子の管理を行っているのも会長の自宅である。いずれも、熊谷うちわ祭の鳶職における権威は木遣や梯子乗りなどの技術である。熊谷うちわ祭の鳶たちはほとんどが古くから熊谷に在住し、現在も活動を行っている。また、かつては旦那衆も代々の旧家や名家が歴任しており明確に階級的な権威が存在していた。熊谷うちわ祭の鳶職においても、代々組頭を歴任してきた家が明確に存在していた。しかし、その一方で鳶職が持っていた権威は残っていた。

（2）旦那衆への権威

制度的な旦那衆 ある祭典関係者は、「昔の大総代は、「熊谷一の大旦那にさせていただいているから、金は出すからその他（山車・屋台巡行などの祭典行事）は任せた」と言って、多く宴席を開いて振り舞いをやってくれた。最近では、そんな人は少ない」と語っていた。現在、熊谷うちわ祭での費用は、町内の寄付金以外に熊谷市からの補助金や公式スポンサーからの費用で賄われている。熊谷うちわ祭では、2000年代までは町内からの寄付金で行われていた。その中で、年々祭礼の規模が大きくなることによって、徐々に町内だけの寄付金では祭礼が運営できないため、公式スポンサーの資金が使用されるなどの変化が起きた。その中で、総代の役割は資金の出資者から寄付金を集める人に変化していったことが指摘できる。

その他に熊谷うちわ祭は熊谷市指定無形民俗文化財に登録されており、熊谷市の補助金からも資金が提供されている。また、祭典関係者は埼玉県文化財指定を目指している人もいる。埼玉県の文化財に指定されるためには、古文書などの歴史資料などが不可欠である。熊谷うちわ祭の場合、詳しい文献などはほとんどが明治時代に記されたものが中心である。また、パンフレットに記された「町民

一体として始まった伝統」「江戸からの祭文化の継承」「自ら熱意で祭をつくり上げてきた熊谷人の心意気」と、祭礼の実態から大きく乖離している。その中で、熊谷うちわ祭の歴史性や正当性を強調するために、権威的な関係性が創造されたと指摘できる。

その一方で、「熊谷うちわ祭はダメだ。川越祭と比べて歴史も違うし物が違う。うちわ祭が県の祭礼になるのは難しいことだ」と語っている祭典関係者もいる。熊谷うちわ祭においては、熊谷市の文化財から埼玉県が無形文化財への登録を目指す動きがみられる。また、平成28(2016)年に山・鉾・屋台行事がユネスコの無形文化遺産に登録された際、さらに文化遺産化へ向けた動きが強まっている。また、県指定の文化財を目指す目的に関しては、熊谷の誇りを昇華させたいというものの他、祭礼の補助金を期待する声も聴くことができる。

熊谷うちわ祭では、かつて祭礼内にあった旦那衆という権威の源が消失していった。その後、祭礼の外部に存在する団扇天王祭や京都祇園祭などとの関連性が創造された。その目的は、祭礼の優位性を担保するためであった。かつては、熊谷市内に大店の主人を中心とする旦那衆が存在した。その後、2000年代にかけて旦那衆が減少していった。その中で、祭礼の資金は公式スポンサーの資金が運用されているようになった。いずれも、この権威については祭礼内に源がない権威である。これは、埼玉県と群馬県の境目に存在する熊谷市という地域が大きく影響しているのではないかと考えられる。

結論

本稿では、熊谷うちわ祭と他の祭礼のつながりをもとに祭礼における権威の動向について考察を行った。熊谷うちわ祭内の権威創造については、総代と鳶との相互交渉によって権威が創造されてきた。その一方で、外部的な京都祇園祭などとの関係性を持つことは、祭礼の正当性を祭礼内外に主張することを目的としている。外部の祭礼との関連性は、自分たちの地域内での祭礼の権威が消失した際に、他の場所から関係性を借用して持ってくるものである。

もともと、熊谷うちわ祭では、旦那衆という権威が存在していた。その後、旦那衆が衰退していく。かつては、市役所などの関わりがなく祭礼が運営されていた。近年、熊谷うちわ祭では外部から資金を獲得する公式スポンサー制度が展開された。それらの資金は外部から調達されているものであり、熊谷の旦那衆の資金源ではなかった。

その一方で、熊谷うちわ祭以外の権威で、京都祇園祭、絹産業との関係がパンフレットで示されるようになる。これらは後の時代に表面化したことや後の時代によって作られたものがほとんどである。京都八坂神社との関係性は、かつての熊谷うちわ祭の権威が崩壊した後に、新たに創造された。また、その一部には文化財化への狙いがあった。京都祇園祭との本家分家の関係を創造することについては、京都祇園祭との権威を借用することにより歴史性と正当性を補完するためということが確認できる。さらに、ただ関連性を主張するというだけでなく、京都八坂神社公式参拝など実際に行動に移しているものもある。また、熊谷市の中に権威の源泉を置くことをしなかったのは、県境や宿場町として栄えたため中心となるものが存在していないなどの地域的影響が存在していたと思われる。

本稿では、熊谷うちわ祭側が創造した権威の関係性について考察を行った。しかし、京都八坂神社、日本橋団扇天王祭、富岡製糸場側から見た熊谷うちわ祭については明らかにすることができなかった。

今後、権威にされた側の視点についても検討していきたい。

注

- (1) 渡邊欣雄 1990 『民俗知識論の課題—沖縄の知識人類学—』凱風社
- (2) 市東真一 2017 「都市祭礼における鳶の変貌—熊谷うちわ祭を事例に—」『長野県民俗の会会報』40号 長野県民俗の会、2019 「祭礼における旦那衆の権威の創造—埼玉県熊谷市 熊谷うちわ祭を事例に—」『日本民俗学』297号 日本民俗学会、2020 「都市祭礼における若者組織の結成—熊谷うちわ祭の祇園会を事例に—」『信濃史学会』72巻1号 信濃史学会
- (3) 例えば、熊谷駅に隣接する町内は熊谷市内の鉄道の記載などを書き足している。これらのパンフレットは、年番町の歴史を絡めながら作成されている。
- (4) 熊谷市立江南文化財センター 熊谷デジタルミュージアム (<http://www.kumagaya-bunkazai.jp/museum/jousetu/bunkazai/251bunka.htm>) 2020年9月25日
- (5) 平成27(2015)年は第壱本町区が年番町であった。

参考文献

- 赤坂憲雄 2004 『現代民俗誌の地平2 権力』朝倉書店
- 一志茂樹 1974 『歴史のこころ 日本史学会に対する苦言』信濃史学会
- 熊谷市立図書館編 2003 『熊谷歴史年表—市制施行七〇周年記念—増補改訂版』熊谷市図書館
- 熊谷八坂神社祭礼行事保存会 2015 『熊谷うちわ祭の歴史—未来へつなぐ 熊谷うちわ祭—』熊谷八坂神社祭礼行事保存会
- 埼玉県教育委員会編 1985 『埼玉県祭礼基本資料収集調査報告書 埼玉の祭り』埼玉県教育委員会
- 重竹賢一 1992 『熊谷祇園祭』私家出版
- 埼玉県編 1991 『新編埼玉県史資料集 14 近世5 村落・都市』ぎょうせい
- 市東真一 2017 「都市祭礼における鳶の変貌—熊谷うちわ祭を事例に—」『長野県民俗の会会報』40号 長野県民俗の会
- 2019 「祭礼における旦那衆の権威の創造—埼玉県熊谷市 熊谷うちわ祭を事例に—」『日本民俗学』297号 日本民俗学会
- 2020 「都市祭礼における若者組織の結成—熊谷うちわ祭の祇園会を事例に—」『信濃史学会』72巻1号 信濃史学会
- 新島章夫 2001 『関東一の祇園 熊谷うちわ祭』さきたま出版会
- 福間裕爾 2004 「「ウツス」ということ—北海道芦別健夏山笠の博多祇園山笠受容の過程」『国立歴史民俗博物館研究報告』114号 国立歴史民俗博物館
- ベルセ イヴ=マリ (1980 井上幸治訳) 『祭りと叛乱 16～18世紀の民衆意識』新評論社 (Yves-Marie Bercé 1978 Fête et révolté, Librairie Hachette)
- ボブスボウム エリック、レンジャー テレンス編 (1992 前川啓治 梶原景昭訳) 『創られた伝統』紀伊国屋書店 (Eric Hobsbawm and Terence Ranger (eds) 1983 The Invention of Tradition, the University of Cambridge Press.)
- 渡邊欣雄 1990 『民俗知識論の課題—沖縄の知識人類学—』凱風社

新聞記事

『埼玉新聞』 2015年7月3日 「熊谷うちわ祭 団扇配布、明治35年頃 山車・屋台導入と同時期と判明」